本的キリスト教も何々的キリスト教もイエスに帰ることによって、はじめて新しくなる。イエスの思想はいわゆる宗教ではないんです。イエスは宗教性であって、制度、教義、儀礼というものを全く必要としない、そういう新しい人間でありました。

南　富鎮

南：筑波大学の南富鎮です。この三日間の発表を聞いて感じたのは、多くの発表が、ほとんどの発表がそうだったと思うんですが、韓国の近代、あるいは近代文化、近代文学という用語を自明のものとして語っていることです。植民地の近代化論もそうですが、すでに近代という枠組みで植民地期を語っている印象でした。果たしてそうなのか。近代という形で、そのような実態があったのか、自分なりでいろいろ考えてみました。現在、モダニズム、ポストモダニズム、コロニアリズム、ポストコロニアリズムなどと、いろいろ言われているのですが、もしも、近代というものが存在しないということになるとそれに対してのポストという概念もなくなってしまう。ひょっとしたらポストモダニズム、ポストコロニアリズムという概念によって近代の存在が追認されているところもあるのではないかと。たとえば、韓国近代文学というのは、私が大学に通っていた時期にはこういう言葉を使わなかったのです。中国は現在も近代文学という言葉を設定していないそうですが、それは何故なのか。近代という言葉に帝国主義の臭いが強烈に入っているからなのではないか、私は自分なりにそう考えております。

一方で、韓国近代文学は、日本近代文学の方法論を盛んに取り入れている。たとえば、肉筆原稿や書簡の重視、学会、個人学会、あるいは全集の作り方などは、日本近代文学を意識しながら作りあげられたものと、私は思います。韓国近代文学は日本近代文学に対抗する形で、あるいは日本近代文学に照射されることによって出来上がったものであって、それ自体として本当に存在しているのか疑問なわけです。日

本近代文学という一つの規範があって、それに見合う形で韓国近代文学が作りあげられたということです。となれば、果たして近代という概念の実在性は自明なものなのか。歴史学では近代を示すようないろいろな統計があるし、現に学校があり、警察があり、鉄道も存在しております。通常、近代を扱う時にはこういう制度があるから近代が存在している、という発想があります。しかし、制度があるから近代が存在していることになるのか。その肝心な近代的な内面は果たしてどうなっているのか。たとえば、恋愛という言葉は存在します。新女性という言葉も存在します。そのような言葉はあるのですが、それがどの程度にまで内面化されているのか、それをもう一度見直す必要があると思われます。もしかすると、韓国の近代は幻影として、あるいは幻想として存在しているかも知れません。たとえば、発表の中でも出てきた親日文学というものですが、親日文学は基本的に日本語で書いたものを指すわけです。そうした作品の中に国策的な内容があり、それで親日文学になるわけです。日本語で書いたというのが親日の大きな決め手になるわけです。しかし、私は現在、日本語に向かう情熱と欲望という点からこの問題を再検討しております。というのは、植民地の日本語の問題にしても、何人かの作家が日本語で書いたというようなものではなく、そうした日本語文学を支える膨大な数の層が存在していたからです。私は日本語の新人懸賞小説に応募している朝鮮人作家志望者（書き手）を調べたことがありますが、そこには日本語で自己を語りたい、日本語で何かを訴えかけたいといったような欲望と情熱を持っている朝鮮人が多く存在している。もちろん強要ではなく自由投稿なわけですね。こうした層の中に日本語で書いていく構造があるわけです。こうした構造を無視して一方的に親日文学として切り捨てると、それと同時に文学的な内面性、文学の成熟のこともすべて切り捨てることになると思います。

さらに親日文学の問題として、「なぜ日本語で書くのか」という問題があります。親日家として出世するためなのか、強要なのか、という問題です。いわば文学内部の問題なのか、文学外部の問題なのか、

あるいは日本語で書く文学的な必然性というようなものは全くなかったのか、というような問題です。こうした内面の問題を論じるのは非常に難しいのですが、ちょうどそうした問題を取り上げた作家がいるんですね。金聖珉という作家ですが、彼は文学的な問題として朝鮮語では作品が書けないというのです。なぜ書けないか。そこには近代朝鮮語の問題が存在しているということになります。つまり、朝鮮語では近代小説が成り立たない、という本質的な問題が問われているのです。日本語で書くのは単に国策のためではないということです。言語的な問題、つまり言語と内面性の問題を指摘したのです。それを私なりに考えると、いわゆる言文一致化された近代語というのは近代的な言語の磁場を持つものですが、近代朝鮮語（ハングル）ではそうした磁場の形成が難しかったのではないかと思うのです。そうした状況はベトナム語も同じような気がします。東南アジア、いや被植民地国家のすべてがこうした近代的な言語の磁場を持つことができなかったように思われます。ここで一つの問題提起として考えられるのが、果たして韓国で近代が成り立つのか、旧植民地において近代が果たして存在しているのか、ということです。韓国の近代というのは、ただの幻想と幻影として存在していているかもしれないという疑念があるからなのです。となると、いま流行のポストモダニズム、ポストコロニアリズムというのは何になるのか。存在しない近代をさらに強化するものではないのか。つまり、ポストの設定によってポスト以前が強化されることにはならないか。近代がそうであったように、こうした現在の流行が植民地主義の強化になり、またそれが新植民地主義の生産につながることにならないだろうか。アジア諸国は今、ベトナムと東南アジアの諸国や韓国もそうなのですが、独自的な知の貧困から、「近代」「近代文学」を造り上げると同時にポストモダニズム、ポストコロニアリズムも設定していかなければならない状況に追い込まれている。レールはどんどん敷かれてしまうわけですね。独自の展開がなにも出来なくなってしまう。こうした状況はますます加速されていくのではないでしょうか。今、中国の場合は近代文学や近代と歴史区分を

使わないそうですが、これは中国の一種の独自的な思想によるものと思います。しかし、いずれアジア的なグローバリズムの中で、あるいは世界的なグローバリズムの中で、中国もいずれ近代文学を創設し、近代という時代区分も設け、近代としてこれからやっていくのではないかと、勝手ながら心配もしております。時間になりましてのでこれで終わりにします。

並木真人

並木：フェリス女学院大学という、昨日李省展先生のご報告の中でご紹介いただきました、日本で最初の女子学校から参りました、並木と申します。

私は、この三日間、多くの先生方の迫力あるご報告をうかがって圧倒されている状況でありまして、未だ充分に整理がつきかねております。しかしながら、この三日間の討議の中で、私なりに得られた成果を二点ばかりご紹介することで、ディスカッサントとしての責務を果たしたいと考えます。

まず一つ目の成果と私が考えるのは、鄭在貞先生、李鍾旼先生、それから尹健次先生を中心に、多くの先生方がお話しくださった「近代性」の問題です。ポスト・コロニアルとか、ポスト・モダン、あるいは韓国の言い方では、それぞれ脱植民地とか、脱近代というようになるのかも知れませんが、これらに関して批判する立場、あるいはそれを評価する立場、様々な形で学問的な議論が始められたということが、やはり一番重要な成果の一つであろうと思います。コロニアリズム、モダニティー、ナショナリズム、こういった概念は、植民地期の朝鮮のことを研究する場合に頻繁に口にする言葉ではありますけれども、これまで本格的に正面から検討してきたと言い切れるかどうか、非常に危うい状況にあると言わざるを得ません。このような状況に関して、例えば、ハーヴァード大学のカーター・エッカート（Carter J. Eck-